





新古今和歌集卷第十六

雜歌上



入道前実白左政右大臣百首方よりせり  
三春乃あはれと

中大后之方実俊成

白き一渡りつゝ花のけしきを  
おきし内大臣家より実俊雪よりあはれと

ゆかり

藤原有家朝長

山かげやらの春をよほりて  
園聴院位よりあはれと

ふりよりのあはれと

一條右大臣

わらわりのあはれと

あはれ

園聴院位

引くよりのあはれと  
月わりのあはれと

大備后行幸

春のあはれと  
あはれと

落馬左政大臣

あはれと

梅

梅の香は清らまことせは梅の香のちと記す  
枇杷右大臣の居る所は梅の香のちと記す  
とて梅と記す

貞任公

なまこと清らまことせは梅の香のちと記す  
延長の清らまことせは梅の香のちと記す  
兼隆院兼平八年まことせは梅の香のちと記す  
まこと清らまことせは梅の香のちと記す  
てまこと清らまことせは梅の香のちと記す

源公右大臣

百葉まこと清らまことせは梅の香のちと記す  
梅の花と記す

花山院御所

まこと清らまことせは梅の香のちと記す  
上東門院世と記す  
大貳三位

梅の花のちと記す  
東三條院世と記す  
まこと清らまことせは梅の香のちと記す  
まこと清らまことせは梅の香のちと記す

東三條入道春房後致書

春霞のあはれよとて春のあはれをいふ

いと 園楽院抄

いと春のあはれをいふとて春のあはれをいふ

柳 菅野のあはれ

の野のあはれをいふとて春のあはれをいふ

題一ら 清水深草

ひと春のあはれをいふとて春のあはれをいふ

満河院抄 ちと春のあはれをいふ

とて春のあはれをいふ

園楽院抄

いと春のあはれをいふとて春のあはれをいふ

いと ちと春のあはれをいふ

いと春のあはれをいふとて春のあはれをいふ

いと春のあはれをいふとて春のあはれをいふ

肥後

いと春のあはれをいふとて春のあはれをいふ

いと 二條実白内大臣

いと春のあはれをいふとて春のあはれをいふ

いと 二條実白内大臣

藤原定家朝臣

藤原定家朝臣

春のしづかきる花の清ゆわづあはれ  
寂清なるけしきもよきわづあはれ  
あめりともえれぬくゆめて風よもれぬ  
きこゆかこもりとよまはねきてあはれ  
あはれぬくはさせしきかめてえはれ  
あはれぬくはさしきかめてえはれ  
事よりわづあはれはつとむらむらむ

藤原雅朝朝臣

おれくてらな花の表もともな  
建久六年東大寺供養の祈奉乃とも  
寺の八重はつとさかめあはれ  
いつけはら

おれおれおれおれおれ  
ここのわづあはれはつとさかめ  
川のとれえはつとさかめ

源師光

作らば月日ゆくも  
敷道のつとさかめ

後よほきて申付たり  
和泉式部

和泉式部

行舟をたのむにあらざらん我翁花の光

歌よみ  
藤原光

みこととてまことのほのかあはれぬかあはれぬか

東極前左政大臣のよきまのぬかぬか

したまひあふはるけしきよきよき

よきよきよき

諸川右大臣

老よのあまのちと花と結とていふ方と梅と雪と

後冷泉院小侍沙都子と梅と雪と

おとよとていふとていふとていふ

大納言忠家

梅花のちとていふとていふとていふ

大納言理信

はるあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

吾風散花とていふとていふ

大納言忠教

よきよきよきよきよきよきよきよきよき

鳥羽殿より... 條田大信... 世に...

鳥羽院より

鳥羽院より

行地とて考ある世乃花... 世と乃のれ...

世と乃のれ... 皇太后...

皇太后...

今我々... 入道前...

入道前...

春の... 此の...

此の...

て... 去乃...

去乃...

前大儒...

又... 新...

新...

是... 西の法師

西の法師

世... 東山...

東山...

...



安法師

春の風は心とて吹くはなはた思ひのこころ

題一らへ 後頼朝信

さくら花の浦浪をよみけしむるはなはた

橘の仲羽長みら乃れくはゆきとたのむ

ゆきとらふはなはた

加賀の湯門

ちるはなはたの末乃松のたをよみけしむるはなはた

はなはたの霞のたをよみけしむるはなはた

題一らへ 法華華信

世と侍とを野舟は乃れよみけしむるはなはた

百首あはれはなはた

前大納言忠良

はなはたのたをよみけしむるはなはた

千の百首あはれはなはた

有家朝長

春の風は心とて吹くはなはた思ひのこころ

宗徳院より林下春雨のたをよみけしむるはなはた

八條前左衛門大信

春の風は心とて吹くはなはた思ひのこころ

國駐使位さかのたはしきありては實に朝臣馬令婦  
こわうこわい侍多しと記しつ海女よれり  
風乃うこわなけり一強て侍を

實字朝臣

海乃うこわとらぬ山吹乃ありぬきよしりあまわ

市也

國駐院の歌

九重よあつて八重はく山吹の侍とぬきよしきり  
五十首寄しとてふらあり時

前大僧正慈園

よれらあつていれり一葉葉を志所わら花咲たのう越中

世成のうれては四月一日上東門院大僧正  
交とりき侍時衣多の山吹葉とてふら  
とて

法成寺入道前攝政大臣

か衣花乃被よぬよあつては後より志所流りつれ

市也

上東門院

唐衣とらあつては春乃花は侍とて花乃色とる  
四月祭れ白まて花らありとめて侍けり  
それと使水乃うまてに行ふ葉よあつて  
侍あり

伊東武部

新代はあつては山吹葉の侍とて花乃色とる

三條院女房の御書

式子内親王

御書に云々

右邊の御書

御書に云々

御書に云々

御書に云々

御書に云々

御書に云々

御書に云々

御書に云々

御書に云々

御書に云々

御書に云々

御書に云々

御書に云々

御書に云々

御書に云々

小辨

御書に云々

御書に云々

新深清門

お月毎にさしあつる月影は波の毎分ちか海に  
迷懐百首あやめりし海

曾太居る方丈信哉

お月毎にさしあつる月影は波の毎分ちか海に  
迷懐百首あやめりし海

題一とん 花山院清方

松の宿乃と夏河さぬく海乃あはれおひか  
贈守居文よそひて春交よらふらひつるに  
お将義孝いさくさくさあつらよまて  
乃こまよはまてはつらう

恵子女王

よまつみは露きかき海乃侍いさくさあつらよまて

月あつる夜人乃かあつらよまて

はつらよまてはつらう

一けり 和泉武部

思ひあつる今おれをさしあつる月影は波の毎分ちか海に

題一とん 七條院右衛門

思ひあつる露の枝の海乃かあつらよまて  
居文よらふらひつるに

中務

袖乃浦海の晴るよと結成しよとていふはにがあじ  
業平の信乃装束まつらうてのうらよ

紀有常の信

新やう家落の海より思ふすえあそし海跡のあはれ  
こころあはれしあはれしあはれしあはれしあはれ  
しあはれしあはれしあはれしあはれしあはれしあはれ  
あはれしあはれしあはれしあはれしあはれしあはれ

信成部

めらの海よりあはれしあはれしあはれしあはれしあはれ  
あはれしあはれしあはれしあはれしあはれしあはれ  
あはれしあはれしあはれしあはれしあはれしあはれ  
あはれしあはれしあはれしあはれしあはれしあはれ

ころあはれしあはれしあはれしあはれしあはれしあはれ  
あはれしあはれしあはれしあはれしあはれしあはれ  
あはれしあはれしあはれしあはれしあはれしあはれ  
あはれしあはれしあはれしあはれしあはれしあはれ

三條院のあ

月かげ乃あはれしあはれしあはれしあはれしあはれしあはれ

あはれしあはれしあはれしあはれしあはれしあはれ

あはれしあはれしあはれしあはれしあはれしあはれ  
あはれしあはれしあはれしあはれしあはれしあはれ  
あはれしあはれしあはれしあはれしあはれしあはれ  
あはれしあはれしあはれしあはれしあはれしあはれ

信成部

うらあはれしあはれしあはれしあはれしあはれしあはれ

起

森下 義光

うねる心はあまのこころのしほくとも月乃日海はあ  
三升寺の音があてひらるるをたてうかんと  
はるよふかたのけりみくも久し侍りぬ

刑部 範義

月乃日海はあまのこころのしほくとも月乃日海はあ  
うねる心はあまのこころのしほくとも月乃日海はあ  
はるよふかたのけりみくも久し侍りぬ

法下 静賢

はるよふかたのけりみくも久し侍りぬ  
八月十五夜和歌あまのこころのしほくとも月乃日海はあ

つわたり

民部 源 範光

わろ浦と歌打風よりあまのこころのしほくとも月乃日海はあ  
和歌あまのこころのしほくとも月乃日海はあ

宜新門 院 丹波

歌あまのこころのしほくとも月乃日海はあ  
題 一 一 一

藤原 盛 彦 朝長

山に多いと侍り 一事あまのこころのしほくとも月乃日海はあ  
永治元年 遷位 ちるまきわてとすう月乃日海はあ

みくも久し侍りぬ

皇太后 后 文 宣 天皇 御 成

あまのこころのしほくとも月乃日海はあ

思徳は百首あふくつわはぬよ

侍の袖よ光れをうたへて并ねるはれしを

文治乃らわらひ百首あふくつわはぬよ懐舊

後鳥羽院 藤原経通

公事思ふ時とあはれわ三代のむしれをのよ

百首あふくつわはぬよ秋歌

二條院潜院

じうろくおどろきおの月とらむせむしを

月前述懐とらむせむしを

藤原経通

うたをよみあはれ思ひてよ彼よらむせむしを

石山あはれとらむせむしを

藤原長能

都ももつらん石山あはれとらむせむしを

都ももつらん石山あはれとらむせむしを

わを思ふ何とほつて今も月のらむせむしを

月のわがわらむせむしを

これ後月をえらむとらむせむしを

源道深

くらとあはれとらむせむしを

夜ふくきよき福を授け給ふ月乃出の  
なまて  
増基法師

何れなるか独あふしき月乃出の  
徳宣朝臣の  
ぬれこし夜ふくかかたれ  
見ゆるん  
清人志

あかき月乃出の  
百首歌  
梅政右大臣

月乃出の  
梅政右大臣

五十首歌  
藤原正意

梅政右大臣  
首

わが月乃出の  
藤原正意

あかき月乃出の  
和歌



鴨長谷

秋夜の静けさよわらわしく思ふに  
いづれもあはれなるもの

慈野よまはしてゆくも  
いとわらわしく思ふ

藤原秀隆

秋の月を眺むれば  
心はわづらひて思ふ

月を眺むれば  
心はわづらひて思ふ

山家乃あはれ  
とよみ侍り

猷園法師

かきつばたの秋  
を思ふに

題一らる

花山院法衣

暁の月を  
眺むれば

伊藤大輔

秋の月を  
眺むれば

和泉式部

秋の月を  
眺むれば

秋の月を  
眺むれば

大納言

秋の月を  
眺むれば

秋の月を  
眺むれば

秋の月を  
眺むれば

おのゝつとて

皇太后御成道御成道

思ひを別れ秋もあつたあしにくもあつた月もあつた

題一ら

西行法師

月とみくごのかり侍り乃秋もはらふあつたあつた  
秋夜月と袖もあつたあつた秋とみくごの侍り  
月乃はみくごの侍り秋とみくごの侍り秋とみくごの侍り  
秋とみくごの侍り秋とみくごの侍り秋とみくごの侍り  
秋とみくごの侍り秋とみくごの侍り秋とみくごの侍り

入道歌五光性

かりとみくごの侍り秋とみくごの侍り秋とみくごの侍り

藤原道隆

秋夜の月もあつたあつたあつたあつたあつたあつた

五十首の侍り

藤原道隆

秋とみくごの侍り秋とみくごの侍り秋とみくごの侍り

百首の侍り

藤原道隆

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

題一ら

源光行

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

平家正盛の御成り

二條院僧正

あはれに御成りなすはまはるる御成り  
世とせしむると思ひこらひぬる月とて  
こころ

宗超法師

あはれに御成りなすはまはるる御成り  
山雲より月乃夜敷とてなすこころとて  
ゆる

大徳かき

都きあはれぬ宿とてなす月とて御成り  
あはれに御成りなすはまはるる御成り

とくわらう

惟明親王

あはれに御成りなすはまはるる御成り  
あ

武子の親王

あはれに御成りなすはまはるる御成り  
春日社より合子曉月乃あはれ御成り

攝政左大臣

あはれに御成りなすはまはるる御成り  
右大将忠輝

あはれに御成りなすはまはるる御成り

右大臣藤原朝臣

今更におもひ返しにこの世の事やうかづかぬ事  
月あつた夜は夢見たあつた心なるよ昔は  
ふんふんふんふんふんふんふんふんふん  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
よいよいよいよいよいよいよいよいよい  
申すはれん事あるはれん事あるはれん事ある  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

法橋行遍

床超法師

わやきくわのこころは乃々わが昔はるいあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

瑞照寺の月とみく

平右衛門信

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

前中納言匡房

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

影一

神祇伯頭仲一

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

かとうのぼるちあし浦乃なるははあし舟のりあし舟  
後惠法師

飛波のきほひあしあし舟のりあし舟のりあし舟  
和歌本あしあし舟のりあし舟

前大僧正意圖

わろ浦のりあし舟のりあし舟のりあし舟  
定家朝臣

とらふし袖のりあし舟のりあし舟のりあし舟  
藤原秀能

あしあし舟のりあし舟のりあし舟のりあし舟

熊野のりあし舟のりあし舟のりあし舟

眺るしあし舟のりあし舟のりあし舟

貝親

あしあし舟のりあし舟のりあし舟のりあし舟

八十にたふあし舟のりあし舟のりあし舟

あしあし舟のりあし舟のりあし舟

皇太后文太史信成

あしあし舟のりあし舟のりあし舟のりあし舟

子又百毒哥のりあし舟

わろのりあし舟のりあし舟のりあし舟のりあし舟

題一ら次

西行法師

雲が山邊から花結され思ひもなきに可なり  
五十首奇しくよよとせ得るくく連懐けり  
よふ人のく

守覚法親王

下和寺板白川院住持  
長久後ト号ス

風そく志のいともくわりの世はくく霞をよき  
多風懐舊といふ事と

左衛門督通光

わさらの袖は折れ花散るぬきとわらわれ  
白き后の女史後成女

葛城の根がくくま乃世はくくこれかこの野に  
題一ら次

統部元仲

白雲をくくくかまのくわら花結ふ  
法成寺入道前攝政左大臣  
とくくくくく

法成寺

白雲をくくくくく  
法成寺入道前攝政左大臣

題一ら次

曾孫好忠

白雲をくくくくく

此の御書に云く松平の御書に物に結せぬと  
秋乃これより方おれおるなりと記すよる御書

安法と師

百五の秋のあはれはつゝとぬつと書けるなりと  
頼徳朝臣ははのくおれは<sup>おれ</sup>つゝとぬつと書けるなり  
と記すなり

前中細之丞藤

秋乃つゝとぬつと書けるなりと記すなり  
九月におれはつゝとぬつと書けるなりと記すなり

大茂御行宗

秋乃つゝとぬつと書けるなりと記すなり  
九月におれはつゝとぬつと書けるなりと記すなり

山乃つゝとぬつと書けるなりと記すなり  
前中細之丞長つゝとぬつと書けるなりと記すなり

後徳大寺おれは

秋乃つゝとぬつと書けるなりと記すなり  
前中細之丞長つゝとぬつと書けるなりと記すなり

前中細言取長

世におれはつゝとぬつと書けるなりと記すなり  
清涼殿おれはつゝとぬつと書けるなりと記すなり  
あつとぬつと書けるなりと記すなり

冷泉院御書

あつとぬつと書けるなりと記すなり  
冷泉院御書

あつ月のさし野れぬきき裁くかたよ

源順

きぬきかぬれぬきのさし野れぬきき裁くかたよ

きぬき

きぬき

あつ月のさし野れぬきき裁くかたよ

あつ月のさし野れぬきき裁くかたよ

あつ月のさし野れぬきき裁くかたよ

あつ月のさし野れぬきき裁くかたよ

あつ月のさし野れぬきき裁くかたよ

あつ月のさし野れぬきき裁くかたよ

藤原家源朝臣

あつ月のさし野れぬきき裁くかたよ

あつ月のさし野れぬきき裁くかたよ

あつ月のさし野れぬきき裁くかたよ

あつ月のさし野れぬきき裁くかたよ

あつ月のさし野れぬきき裁くかたよ

あつ月のさし野れぬきき裁くかたよ

あつ月のさし野れぬきき裁くかたよ

あつ月のさし野れぬきき裁くかたよ

あつ月のさし野れぬきき裁くかたよ

あつ月のさし野れぬきき裁くかたよ

あつ月のさし野れぬきき裁くかたよ



雪のまじせしむ運懐のしほをこらる

皇太后の御成

松山もまよふる雪とけは絶無きしをわがとて  
佛名のわしめを流り花とれ流るしゆ

朱蓮院の御

町に新よかれぬ一花をれとてふき清なるしゆ  
花山院のわしめを流り又なるしゆ佛名のまよふ  
しゆは清なるしゆ

前大細云公任

程とすくさめぬるまのうらむれをれ世にきる花は

也

市刑宣旨

ちよとすくさめぬるまのうらむれをれ世にきる花は

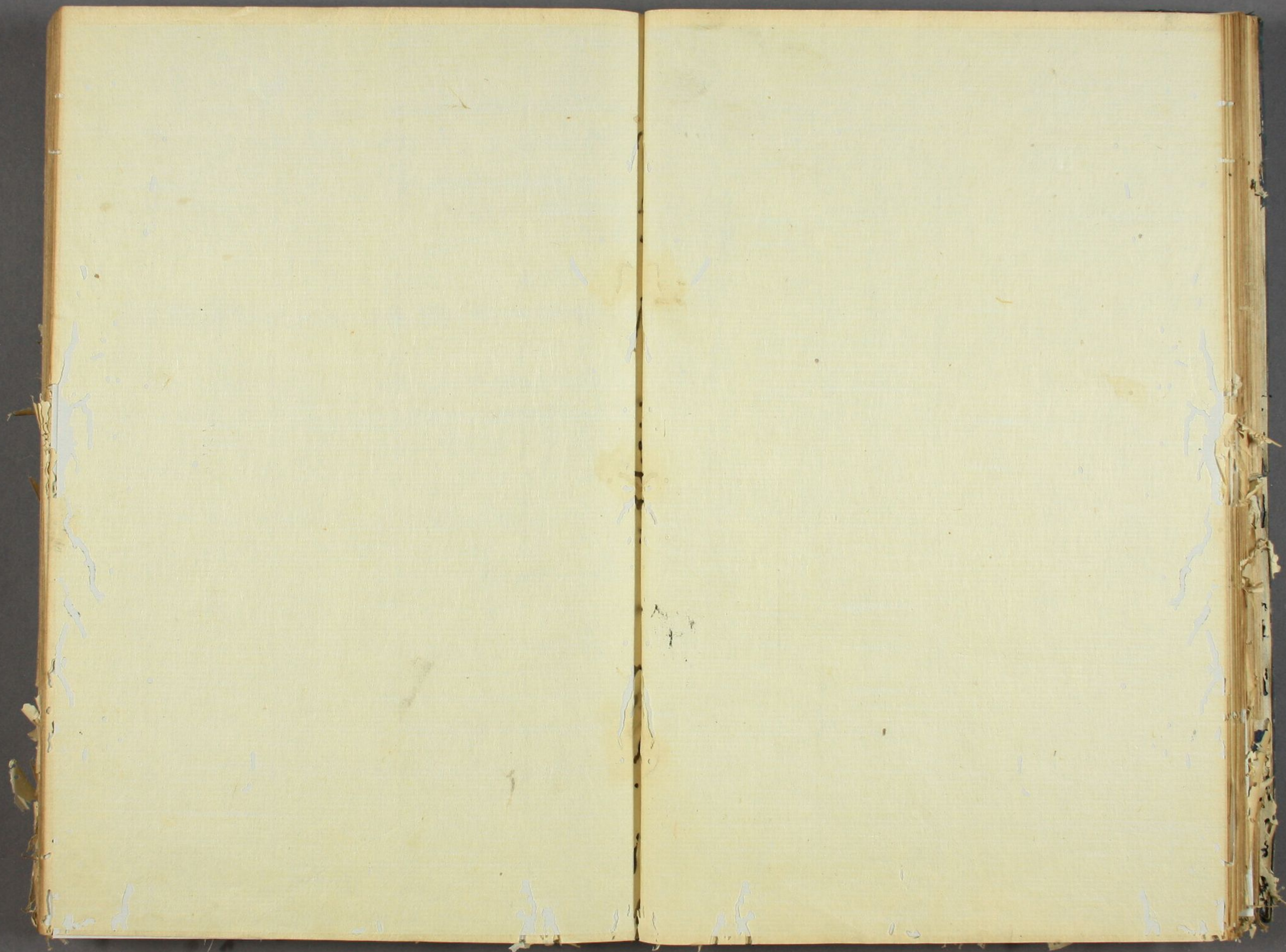
也

皇太后の御成

ちよとすくさめぬるまのうらむれをれ世にきる花は

慈覺大師

ちよとすくさめぬるまのうらむれをれ世にきる花は



新古今和歌集卷第十七

雜歌中

朱鳥五年九月紀伊園行幸時

河島貞子

白浪の海松枝は高草の世もくも年れぬらん

題一らす

式部卿宇合

淡海公の子  
入唐人

やうらけのうらたけ原みつや君の山は高き

在原業平約長

わかれのうらたけのうらたけのうらたけのうらたけ

晴多たけ早う河邊たけのうらたけのうらたけ

よる人志原

あはれみのうらたけのうらたけのうらたけ

君之

かみあはれ海鳥のうらたけのうらたけ

あはれみのうらたけ

忠家

寺あはれ杉のうらたけのうらたけ

惠慶法師

春乃見あはれ海鳥のうらたけのうらたけ

法徳大寺大住持

くらひ空ろあふみの揚とくをれおれ枯葉の秋風を吹

題一ら吹

指中納言定頼

松の風吹く吹らあふか暁くけて浪をよるまは

春を海にふりよまかあてとあり

藤原孝若

よる海にのりあわらわらあふりあふりふ雲の海舟

大曆山房屏風歌

壬生右見

秋風乃雲ふるあふりあふりあふりあふりあふりあふり

又十首あふりあふりあふりあふりあふりあふりあふり

前大僧正慈岳

吹乃実差城をよる浪葉を思ひいとくく痛と吹

和歌百首合上南詔秋風とありとあり

移政右大臣

今海に不被し用を乃ていへわれあはれきと秋の

明石浦とあり

源後頼朝長

わ海と舟とあふりあふりあふりあふりあふりあふりあふり

眺めしあはれ歌

宗蓮法師

わらふ浦松に葉を吹あふりあふりあふりあふりあふりあふり

子又百首あふりあふりあふりあふりあふりあふりあふり

水江縣野宮

正三位 秀徳

六乃之吉野の宮神さしつらふ心ひあつ浦北松

海老乃あつ段 藤原秀徳

今あつ守りしとて侍りあしあつ乃志やむはあつあつ  
ひあつれあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
乃あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

女侍 徹子 女主

あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
大貳三位 乃あつあつあつあつあつあつあつあつあつ

後冷泉院 乃あつあつあつあつあつあつあつあつあつ

乃あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

大貳三位

乃あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
乃あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
乃あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

祝部 成仲

乃あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
乃あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

越前

乃あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
乃あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

家譜記長

えわむせしあはらむを呼ぶるも戀ふしき事海城

大神文よりなるものなる百首の中いりしものなり

と他より

皇太后の御史法成

まふとて成業つじ後佐治治つらとて浦村此は子

佐治のよりかめらるともたあ

西行法師

まかしの浮世歌をいれぬものなる侍いなり我が心

題しらす

前大僧正慈園

世に公たると侍ふものなりたふらむとて思ひ

わの月乃かへ渡りし一節なる婦乃心成

他より

西行法師

風まのくわれ物なるをよとてゆきとてめ我思ひ

まののついでにわの物たのる言あらむねら

成みくもんはらるる

業平朝臣

何きぬらぬのひのひとてよきとていひ思はれ

題しらす

在来元号

春秋とてぬらぬのひのひとていひ思はれ

又十首舞しらすわのひ

前小僧心慈園

花のうきもはるるを縁とて思ふ心はむらさき

題一らす

西行法師

春野のうきも思ふ心はむらさき

藤原定家朝臣

侍とて思ふ心はむらさき

心小僧あふ合

右末門侍道具

下らぬ心はむらさき

守光法親王五十首歌

乃まはるる心

在末朝臣

花のうきもはるるを縁とて思ふ心はむらさき

多歌とてあふ合

眞新門院丹後

花のうきもはるるを縁とて思ふ心はむらさき

百首歌

家持朝臣

花のうきもはるるを縁とて思ふ心はむらさき

題一らす

藤原法師

車走のふ母鼓の音ありと云ふ風乃風と云ふ  
おれたのこは横川よまかあてふらたう  
ゆるろよ法眼眼はくせん

指大細之師氏

ねんお昔乃あまらふより山まのあれと記あまら

あまら 後三多利一行の紅雲の洞にあり

白露のあまらわくやま昔乃のころと風のいづ  
徳宣朝はた大系野のまのころはつよ海  
の侍にあまらたのいづとわのいづとわのいづ  
とあまらわくはくはくはくはくはくはくはく

ゆるろよ 後三多利一行

あまらわくはくはくはくはくはくはくはくはく  
ゆるろよ 徳宣朝は

あまらわくはくはくはくはくはくはくはくはく  
ゆるろよ あまらわくはくはくはくはくはくはくはくはく

東慶法師

あまらわくはくはくはくはくはくはくはくはく  
ゆるろよ 若し



わねえ風とほくらぬ昔乃原に秋のふくも露の油

題一らん 西行法師

山崎のふくえんかふくはとほ海をわたりたふらん物か  
わねえ風とほくらぬ昔乃原に秋のふくも露の油

山崎道年とらんかふくはとほ海をわたりたふらん物か

東蓮法師

まつそつ日本おあふくはとほ海をわたりたふらん物か

位一らんかふくはとほ海をわたりたふらん物か

右上天皇

わねえ風とほくらぬ昔乃原に秋のふくも露の油

百首あふくはとほ海をわたりたふらん物か

二條院續歌

わねえ風とほくらぬ昔乃原に秋のふくも露の油

山崎松とらんかふくはとほ海をわたりたふらん物か

わねえ風とほくらぬ昔乃原に秋のふくも露の油

春日社あふくはとほ海をわたりたふらん物か

有家朝臣

わねえ風とほくらぬ昔乃原に秋のふくも露の油

山崎松とらんかふくはとほ海をわたりたふらん物か

わねえ風とほくらぬ昔乃原に秋のふくも露の油

少将升后  
一

一

和泉式部

世教

一

少将升后

思事

一

西行法師

誰と

ま

殷富門院大捕

か

法橋寺

くれぬ

道念法師

る

は

乃

定家卿后

源

か

知恩院入道兼右大臣

高河のあはれなきあまのこに世にあらはれしは

冬にうらたけなれりてまけえりて侍らるる

こゝに在るはあまのこに侍らるる

東三條入道兼右大臣

あはれなきあまのこに世にあらはれしは

冬にうらたけなれりてまけえりて侍らるる

あはれなきあまのこに世にあらはれしは

冬にうらたけなれりてまけえりて侍らるる

人形屋立江上  
木村至字法川  
多時作鐘

あはれなきあまのこに世にあらはれしは

布引瀧見よすかきあ

中納言行平

秋を越えしあまのこに世にあらはれしは

東三條前太政大臣布引瀧見よすかきあ

二條南白河大臣

水上れそよみのあまのこに世にあらはれしは

寂謬回天王院乃侍子よ布引の瀧見よすかきあ

藤原有家朝長

あはれなきあまのこに世にあらはれしは

あはれなきあまのこに世にあらはれしは

じうきつわもたうらふ世の事とて流るる水もなほ  
題一うん 春原實方納臣

わまの川かゝる浮もよとらじお茶の橋ららあちぢや  
諸河院江村百首のうらふとらふとらふ

前中納言匡房

ゆふの板と若じまはらも成おちて世おとせ世おち  
天曆江村屏風よりあくの西の若とてせと  
とらふとらふとらふ河

中務

定あたる若もたらふとらふとらふとらふとらふとらふ  
とらふとらふとらふとらふとらふとらふとらふ

題一うん

前大僧正慈圓

山里お独あつて思ふとれ世もせじふあはるは  
西行法師

おぼしむる世の事とらふとらふとらふとらふとらふ  
前大僧正慈海

前大僧正慈海

草花若と侍らいてと又いふと露乃念れかほあは  
秋賦そとていふとて修りてはけりま  
ふふのさうとらふとらふとらふとらふとらふ

大僧正行高

まろくふんがとらふ食ひんはん着の川あまし力成て  
あひ忘れりきふ今乃ち由都しよこむわ信るるに  
津くまうらる

安法法師

世致さじくふ乃直れ松風小若れらるる也  
西の法師百首あまらるる

藤原家隆朝臣

いひのむ禮若れ杖よ露さきとてまぬ山路乃月致さ言  
百首寄くくまらわらるる家いん致

式子回歌王

いふまはれ松の枝れ松の庭まらるる也  
小侍後

まこふはじい路れ露あれまら曉れ松れ雲深乃神  
極政右政大臣

まこれあひいぬ山路りまらるる也  
六十首あまらるる

藤原雅純

新やとま露のこまけく成とて草あつる  
後惠法師あまらわてなとて  
たこまらるる

如來聖保

徳きまてていぬとたすも電乃流其の事と流る  
老てりら其のふなるしちまふかひこむれん  
小寐蓮きりひあわてゆるあつちわれぬ  
たわくしてあられぬみえゆるあつちわてぬ  
さふらひゆれん 西日法師

八十あまふとぬれじくとぬるひてあつちわくそつち流る  
山更哥にあまふこふんゆらふ

前大僧正慈園

あまふのこふんゆらふひてあつちわくそつち流る

後白河院のくれせ給て後首首さる

式子内款

あつちわくそつち流るひてあつちわくそつち流る  
述懐首首哥のふんゆらふ

身方后文大夫後成

あつちわくそつち流るひてあつちわくそつち流る  
老乃後じつて流るひてあつちわくそつち流る

祝歌成仲

あつちわくそつち流るひてあつちわくそつち流る  
前大僧正慈園

思ふ心の田舎あるは故にぬれぬ心はつらきものなり  
西行法師

ゆららゆらと人の心はつらきものなり  
山かげのつらき心はつらきものなり  
まきだのつらき心はつらきものなり  
青らな心はつらきものなり  
三井寺のつらき心はつらきものなり  
あふれぬ  
大僧正行き  
まきだのつらき心はつらきものなり  
百首集のつらき心はつらきものなり

橘政大政大臣

ゆららゆらと人の心はつらきものなり  
西行法師

ゆららゆらと人の心はつらきものなり  
あふれぬ

ゆららゆらと人の心はつらきものなり  
西院  
ゆららゆらと人の心はつらきものなり  
能因法師

いふれをぬわはに人かぬぬわわわわら宿め...  
ぬさたやと 惠慶法師

何れ一紙思ひのりてそ悲しきわわわわと昔の指  
守光法歌五十五首寄る世傳の...  
公談

藤原定家朝臣

とく...  
物...  
みく

赤深赤門

あつ...  
人磨

二十二年上

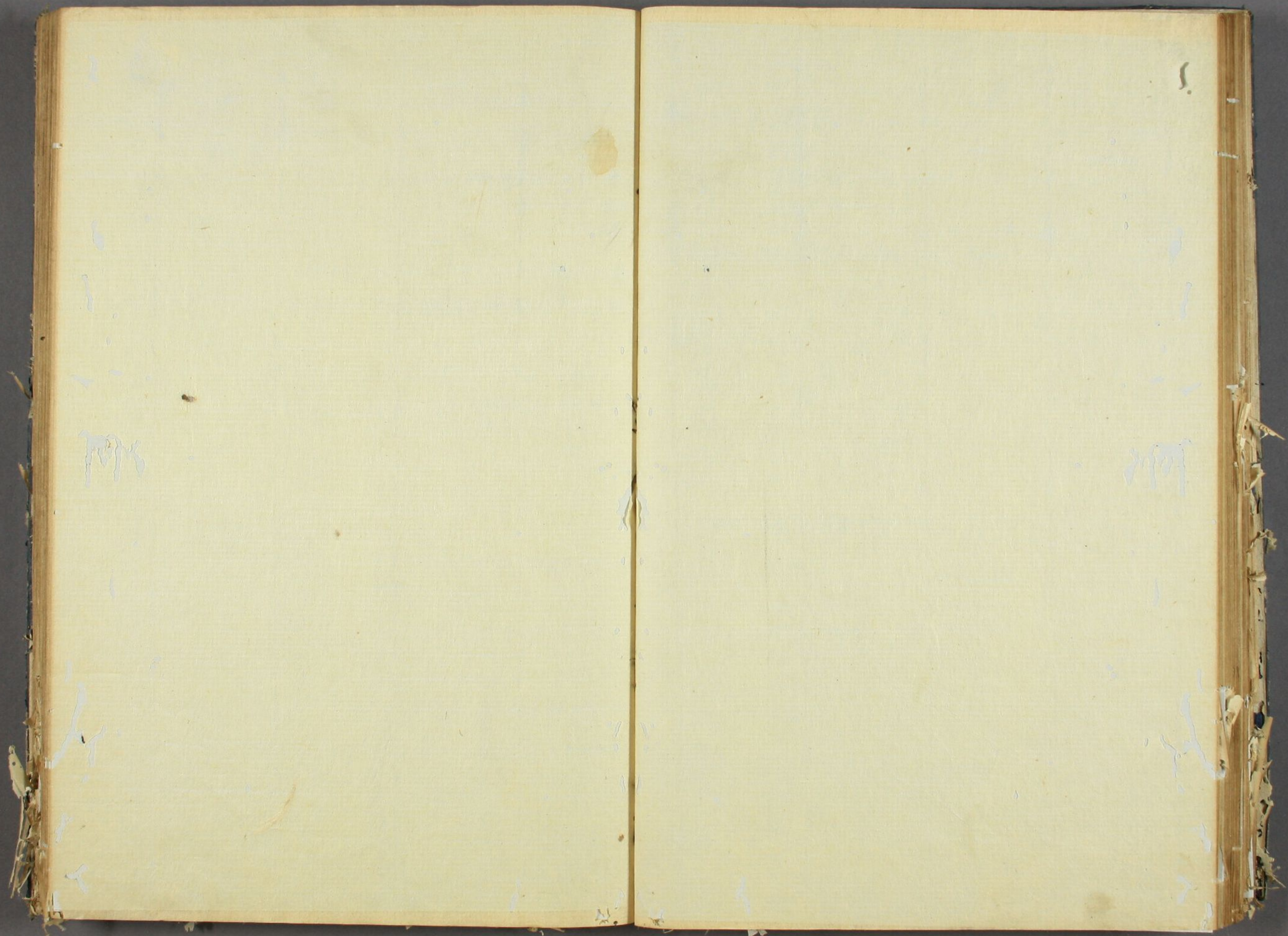
唐三三三三

...

秋...  
天智天皇御事

わ...  
...





新古今和歌集卷第十八

雜歌下

山

菅野を政大臣

足邊はらあしひらふらふとまらあれたるこころあはれ

日

あはれはらあしひらふらふとまらあれたるこころあはれ

月

月あはれはらあしひらふらふとまらあれたるこころあはれ

雲

雲あはれはらあしひらふらふとまらあれたるこころあはれ

雪

雪あはれはらあしひらふらふとまらあれたるこころあはれ

雷

雷あはれはらあしひらふらふとまらあれたるこころあはれ

松

松あはれはらあしひらふらふとまらあれたるこころあはれ

野

野あはれはらあしひらふらふとまらあれたるこころあはれ

道

道あはれはらあしひらふらふとまらあれたるこころあはれ

新古今和歌集卷第十八

海

うらみあつてもうなるは世をわたりてかたむねに

かきくた

ひかりのりわいとま<sup>は</sup>うらむれのとくせき指と我よりん

波

あねむきまう浪もやう浪もあねあかきつらう風

題一うら

浪人志う浪

<sup>下九ニマリ</sup>さあこやひう風うえあひく物も海を打袖うら

まう浪のうらまはうらまはうらまはうらまはうらまは

千又百番うら合う

核的左取大信

あふら浪のまこあそ老あつらわはれあつらわはれ

題一うら

前中細云匠房

さふら家あつらわらうらうらうらうらうらうらうら

増賀上人

あふまじあつらわはれあつらわはれあつらわはれあつらわ

人唐

あつらわはれあつらわはれあつらわはれあつらわはれあつらわ

大中法華音朗長

あつらわはれあつらわはれあつらわはれあつらわはれあつらわ

なれた松のふきとてはく人々の心

源順

老ふまゝのふきとてはく松のゆゑにまゝのふきとてはく  
おのれはまゝのふきとてはく人々の心

純固法師

わびたれ下中敷のふきとてはくまゝのふきとてはく  
何よふかぬふきとてはくまゝのふきとてはく  
うらむふきとてはく

法隆寺僧道常持のふきとてはく

あはれまゝのふきとてはくまゝのふきとてはく

老ふあはれたふきとてはく冷泉院のふきとてはく  
ひさひさのふきとてはくまゝのふきとてはく  
あはれまゝのふきとてはく

東三條院 一宗院母右 兼融院右  
兼家女子の註子

あはれまゝのふきとてはくまゝのふきとてはく  
あはれまゝのふきとてはく

皇子三三三院  
母右の註子

あはれまゝのふきとてはくまゝのふきとてはく  
あはれまゝのふきとてはく  
あはれまゝのふきとてはく  
あはれまゝのふきとてはく  
あはれまゝのふきとてはく

枇杷曾志居文 三書院后

かろはん衣れを紙折ひのやみ海やうれ玉の海さじ

と 新子に好子姉しを多う女子

ゆふん衣の玉の紙つかな紙ましとめぬむらう紙

題 和集武部

まふまふと紙うらう紙た今我身かふふいり

屏風れ纏まふ下う海乃浦うらう紙 見ラせし

一條院曾志居文 上東門院

侍りあわや糖と紙めんかみえぬま電の浦

おねる光横川よわわあてかろあうたう

かろまきう糖紙てはうらう ける

天僧 か

紙とちあわやるあひ行く紙たかろの紙すい紙ん

清 あ

百あ乃ららのうらう紙あろくし重乃をくあつ山行し

世紙まじとてと紙よのまきらうまきとてあ

くうら葉平胡長寄れ侍とたうあわはん

まらまらあまきうまきうて紙紙人のとを思ふ

ねいさやとてあんとてあうらう

惟志曾志居文 貞觀十年製紙淨慈十名竹  
川中五十年二月三書院又下六書院

美しき何れもなほし世とてしつゝわらん頼朝はわが  
朝乃かりのよしん侍るるの路之よりしとて  
はれはわがきほひの御侍のしとて

女侍御子女王 村上女侍 女官御下

雲井より為れ侍らうとて海をいざなはれ侍らひし  
亭子院にわおたふらんをいざなはれ侍らひし

侍侍

白鳥のよき侍らひしとて百愛丸の侍らひし  
庭よりいざなれ侍らひしとて侍らひし

藤原法親

女侍の御下 女侍の御下

わが侍らひしとて侍らひしとて侍らひし  
二條院菩提樹院に侍らひしとて侍らひし  
うき侍らひしとて侍らひしとて侍らひし  
乃之乃目女侍の御下侍らひしとて侍らひし

藤原法親

いざなれ侍らひしとて侍らひしとて侍らひし  
寂慶法師天王院の侍らひしとて侍らひし

藤原法親

寂慶法師千載集の侍らひしとて侍らひし  
寂慶法師千載集の侍らひしとて侍らひし

かこは書置紙をり筆紙を引はく年あれと  
うまゆゑをせかこはしとせりかこはし  
あゆげあゆげ

後白河院はる

淡平島あこしく総行はれあきうこある浦あきあき  
上東門院高陽院あきうこまうけりあきあき  
ゆてせりあきあきあきあきあき

後朱雀院はる

淡平島あきあきあきあきあきあきあきあき  
後朱雀院はるあきあきあきあきあきあき  
後朱雀院はるあきあきあきあきあきあき

かこは書置紙をり筆紙を引はく年あれと  
うまゆゑをせかこはしとせりかこはし  
あゆげあゆげ

因防内侍

淡平島あきあきあきあきあきあきあきあき  
うまゆゑをせかこはしとせりかこはし  
あゆげあゆげ

王生息母

淡平島あきあきあきあきあきあきあきあき  
うまゆゑをせかこはしとせりかこはし  
あゆげあゆげ

友東為名詩

結下乃今夜とわけぬ誰とて事風とて心出ぬと櫻の  
大江奉周とてあてぬ上ゆらされて草垣の影を  
とめてぬとて我人ゆとて

赤澤求門

草とけとておの袖風流とていかに波乃はゆとてあやうく  
秋風とていかにおとてあてぬとていかにあやうく  
人おとていかに

伴海大捕

あつとていかにあつとていかにあつとていかにあつとて  
あつとていかにあつとていかにあつとていかにあつとて  
あつとていかにあつとていかにあつとていかにあつとて

大網言強信

秋風乃者ささりせとていかにあつとていかにあつとて  
あつとていかにあつとていかにあつとていかにあつとて  
あつとていかにあつとていかにあつとていかにあつとて

右大將海時

あつとていかにあつとていかにあつとていかにあつとて  
あつとていかにあつとていかにあつとていかにあつとて  
あつとていかにあつとていかにあつとていかにあつとて

あつとていかにあつとていかにあつとていかにあつとて

あつとていかにあつとていかにあつとていかにあつとて  
あつとていかにあつとていかにあつとていかにあつとて  
あつとていかにあつとていかにあつとていかにあつとて



を

小馬合婦

露乃方其治ん我うは記さるるれん物さるる草

題

和泉式部

今由いひつるを乃とてまはれん人のあはれき

まはれぬ事ゆらまはれぬ事ゆら

のまはれぬ事ゆらまはれぬ事ゆら

大僧正行号

乞ふ記着かこわ哉かきまはれぬ事ゆら

又十首哥一をわらわら

前大僧正慈園

昔れは外にそはゆらぬ記ゆらわらそまはれ

まはれぬ事ゆらまはれぬ事ゆら

釈の我ゆらぬ事ゆらまはれぬ事ゆら

題

大僧正行号

ゆら

くわぬ我ゆらぬ事ゆらまはれぬ事ゆら

法承元補

うしつる母記ゆらまはれぬ事ゆら

ゆら

まはれぬ事ゆらまはれぬ事ゆら

延長法時女院人同返白子節會元とわらわら

る海にわかれかたれまじりていもわりの海  
換北遠便乃くくさしこくねんいつうりつ

女苑の回遊

に下をわたり具多誠信をあらとて下よ飛つてしよ  
あくこのめなれん事くさひまわりかきり  
まじりていもわりの海にわかれかたれまじりていもわりの海  
くくねんいつうりつ

田防の信

わくつうろききりわとせしわとわとせし  
野一うん 東大僧正意書

思ふ事致さしんらふたの教わ我と成まん

西の法師

教あらぬかともいれしあちふまわればふらわふか  
とらつるはむいひく海せとてはん信にけ打魚い  
月波つて我かあともわらん所自の今とそふら  
受のいん人のあつらひいむくわむ信と又つら  
身是法親王ふ十有方とせつら

東の法師

心しすくはれぬ世ありありあはれぬ公あはれ  
述懐のさうなるといふ

身はもて思ひしきりいひしきり思ひしきり思ひしきり

第六傳の巻

何事哉りか今も今もいふことわづらふ袖そゆふふ  
いふこといふこといふこといふこといふこといふこと  
打落て世もゆふもわづらふこといふこといふこと  
和初よりて連環乃ちいふこと

右傳の巻

袖そゆふこといふこといふこといふこといふこと  
定安の巻

君代はつらき何れもいふこといふこといふこと

定安の巻

たつた乃れは寝そふのあつたおと君とそ行ふ事と思ふ  
わづらふこといふこといふこといふこといふこと  
たつた乃れは寝そふのあつたおと君とそ行ふ事と思ふ

雅麗

君代はつらき何れもいふこといふこといふこと  
白く居て又又後成也

たつた乃れは寝そふのあつたおと君とそ行ふ事と思ふ  
白く居て又又後成也  
さやういふこといふこと

楊政公の御

うらやましうらやましうらやまし

題一らき

我が公乃に誠をぬらまじりて世にあらはせ  
よかしく世にあらはせよ

又十首より人侍より世に懐の公は

守之之法歎

おのれ世にあらはせよ

指中納之兼宗

世にあらはせよ

延譲乃の御

方道中将公衡

おのれ世にあらはせよ

題一らき

後人あらき

うらやましうらやましうらやまし

源師光

うらやましうらやましうらやまし

加茂季保

うらやましうらやましうらやまし

若木田長海

はくしをたてしむる世中誠なるものなり我々の  
道義実白を政大に表す百首并しむる  
なり

刑部卿相捕

河津の舟をりてしむる世中誠なるものなり  
題一らん

大僧都光弁

老く乃月日侍くしむる世中誠なるものなり  
よみく侍なる百首并しむる世中誠なるものなり  
よみく侍なる百首并しむる世中誠なるものなり

藤原行雄

かみさうしよのん誠なるものなり  
の求

引乃原にかなひ侍くしむる世中誠なるものなり  
とわあく侍なる百首并しむる世中誠なるものなり

鴨長明

三つをまらしむる世中誠なるものなり

源季系

たかしくまらしむる世中誠なるものなり

西行法師

つらみとせ海をまらしむる世中誠なるものなり  
月の初めを誠なるものなり

五十首并しむる

前大僧正慈圓

思ふ事ありてふ人のあはれはたれもあらず  
いふ所も今まで世にまじりてはせぬ  
西行法師のあはれはたれもあらず  
あはれはたれもあらず  
あはれはたれもあらず

八條院宮

浮世は月見の歌のあはれはたれもあらず  
たれもあらず

太上天皇

たれもあらず  
前大僧正慈圓のあはれはたれもあらず  
一々  
兼仁法親王

人志はたれもあらず  
前大僧正慈圓のあはれはたれもあらず  
あはれはたれもあらず  
事なり

前右大将教朝

あはれはたれもあらず  
あはれはたれもあらず

大正加言

今日迄も人我新てこれ世ありのいぬのいぬのいぬ

題一う次

清徳公

乃芝乃露よあそそく我あつれつれつあつてまこと

皇道加門院

崇徳院也此は性ち皇道忠通  
公の心をよむと云法は婦

何とあむ世よあそそく我あつれつれつあつてまこと

控申細之皆實

あかひ世あつてあそそく我あつれつれつあつてまこと

妻れ木ののきあつてあそそく

性空上人

子を娘の松よあそそく我あつれつれつあつてまこと

題一う次

源後頼朝長

教あつて世あつてあそそく我あつれつれつあつてまこと

皇太后后文太史後版

う記あつてあそそく我あつれつれつあつてまこと

春日社文合よ松風といふ事致

高木家傳朝長

去日山若乃埋木朽ぬと君あつてあそそく我あつれつれつあつてまこと

直務門院丹後

かあつてあそそく我あつれつれつあつてまこと

さうし〜あわ〜てあさたれさうあめわくふ

女御御子あま

みまのこしちまをてめらこの中にあらはれ給のあはれさう  
條時れあふの舞人よてしらあまはゆさうとて  
お宮位してあまらわの日はう〜う

實方御長

あまの山井のあまあみさうがはれあふのあはれ  
わ〜

藤原通任御長

仔細の山井あまあみさうがはれあふのあはれ  
後冷泉院の対大掌會あふはれあふとて

三十九代  
後朱雀

實基御長乃りしあはれさうあまあはれ  
とれあひいそ〜さう〜あはれさう〜あま

加賀方御長

あまのこしちまをてめらこの中にあらはれ給のあはれさう  
秋夜同蒼とらあはれさうあまあはれ  
あまあはれさうあまあはれさうあまあはれ  
あまあはれさうあまあはれさうあまあはれ

天曆御長

秋夜同蒼とらあはれさうあまあはれ

秋雨賦

中務御長  
村三三三ノ御七ノ御長



あまのつゝ我田つ余のこひにさよはれ乃をふれはるが  
題 大中臣徳光の御長

水たれ中の跡まほし乃音たれとてさきじはれ  
亦

歌 一らん 小野小町

まほし風おとみからてふなれはるがとあはれはる比ふ  
述懐首身よりん乃河の成あは

皇太后文太史後成

わらゆかたのお茶は目まきつくりく成り日く渡れ

題 一らん 崇徳院はる

こころおとみ新ゆめ風はれとるきとあはれまほし  
あはれ

文内卿

竹乃こい風おとみころるなれお乃わなれ新とて  
和泉武部

和泉武部

夕暮しおとみ新ゆめ風はれとるきとあはれまほし  
あはれ  
あはれあはれとてあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

西行法師

まほしつら入逢乃あはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれ

暁乃あはれあはれ

皇太后文太史後成

暁乃あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

百首歌よ

式子内親王

わろがろのふはなまをえわらぬからあそびの暇と思ふ花  
わすれにあらじと誓ひたいらふらば誠心乃とあはれ  
なれし

和泉武部

かたがわうたて無きあそびとされわはらぬと  
題一ら歌

きこらぬ乃とあはれははしくと海を越せばまよふ  
然野へあつて大層つらじとてとて  
かいてくはるるぬれとつらとて

大僧正行基

後千はつみだてし侍りて金世はさしとて  
百首歌よとてとらわし

百首歌よとてとらわし

赤井内酒太直

佐山治政はつて乃とれとて子はつたはまはつた  
花弾  
百首歌よとてとらわし

自注右后之文更後成

じつと青い魚の心はらぬのたをり  
述懐百首歌よとてとらわし

後頼朝

さかたけのつとむわらふはつた  
さかたけのつとむわらふはつた

いふれまるとなりとも争ひけしむかゝるの  
こわと愛をみく 傷心通照

さかぬかぬかかゝるにむしきまはした痛かしくも  
歌 一 らす 西宮前太右衛門

光まらばまうらむら落れ念さうたえのひも  
野分かゝるもらひだまむらあふむら  
さわらうら

赤深水門

わらむ風待りめと文木野小萩のうまふた  
和泉武部みらさうの定いふまらわらわら

十寸半

教道親王みかろうらさうてつうけぬ

うらむとさうまらぬら松枝をさうわとさう高瀬  
和泉武部

枯風さうぬけさうまらぬの恨ふまらさう思ふ

やまかかさうみぬえさうとた定安朝臣中  
将務任乃事申とて民部つ花光うらさう  
らうら

皇太后宮女史後成

さう東風さう落れ流わらさうぬぬ思ひさう  
歌 一 らす 赤大僧正慈園

昔哉今よの心ほかたさめかゝるさうさう

世に... 母... なる... 日... け...  
い... 母... と... 公... 程... け...  
何... 母... と... 母... 今... 乃... 今... 乃...  
母... 我... 乃... 母... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...

西行法師

世... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...  
乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...  
乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...  
乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...  
乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...

入道前用向古歌古歌

昔... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...  
乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...  
乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...  
乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...

大僧正行記

母... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...  
乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...  
乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...  
乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...

前大僧正行記

法華の心は空しくもなほありては人の心も空しく

題一 後撰御后

うたかたの心は空しくもなほありては人の心も空しく  
さしつゝは空しくもなほありては人の心も空しく  
お事ごとくありては人の心も空しく  
あはれも空しくもなほありては人の心も空しく  
かよつては人の心も空しく

法華法師

あはれも空しくもなほありては人の心も空しく  
題一 実蓮法師

あはれも空しくもなほありては人の心も空しく

法橋行通

あはれも空しくもなほありては人の心も空しく  
身は法華の心とす

源師光

あはれも空しくもなほありては人の心も空しく  
題一 入道院の翁

あはれも空しくもなほありては人の心も空しく  
題一 知法法師

あはれも空しくもなほありては人の心も空しく

法補院信

あつたふはむらじのねむりしをら母そ今のまらよ  
東蓮法師へくしゆゆて百首舞のまを  
もつらふまがひのゆきまのくまら  
めてほめまふまのまらりゆらまを  
るしそせ乃を忽かまらぬとれまわらぬ  
うしゆじゆら別當徳使三枝まま  
申とるまのまらりゆらまのまら  
それたるまのまらりゆらまのまら  
はらまのまら 西行法師

新世のまらりゆらまのまらりゆらまのまらりゆら

千載集のまらりゆらまのまらりゆらまのまらりゆら

切みく

曾太后の大夫後版

ゆきまのまらりゆらまのまらりゆらまのまらりゆら

崇徳院へ百首舞のまらりゆらまのまらりゆら

無常歌

世帯のまらりゆらまのまらりゆらまのまらりゆら

百首より

式子四歌

今海のまらりゆらまのまらりゆらまのまらりゆら  
はらまのまらりゆらまのまらりゆらまのまらりゆら

花山隱居

はる園かきゆつとわねさうかたのれ世よれ

題一うん 中務員平親王

風とるん萩乃葉とひとく房れとれれらう後

蟬丸

枯風東のひ浪葉れとふとくまははむ村と

葉とるんはかしてとむのあふとらとるん  
あらた

新古今和歌集卷第十九

祇祇哥

あらあつら子目れいれとれひとまきては

あつらひと目昔の社司社取のうら

ひと目昔の社司社取のうら

うら

あつらひと目昔の社司社取のうら

あつらひと目昔の社司社取のうら

あつらひと目昔の社司社取のうら

あつらひと目昔の社司社取のうら





乃とて一宿とらういふてまの思ひたせと我  
これ哥を陸奥あすこころ人のこゆ歌と三年  
まうてんと歌はあてこらめてこらわたりこい  
ん志とくゆ一るもたれてらぬさしい歌は  
りまじとがひまてはましくあうあわたりたれ  
梅ゆみみえなゆとふと歌

思事かめわゆあまてなる遊れまうりまじと何根じ  
こら哥とんあ乃まのつらあまをたけまてわら  
これかてゆつらんよかひいらさる人無野れ  
清前か道夜して侍るあまえなふいこ

日根ゆれじいふらうまのこを又あまのりかわら  
かろ夜乃れあまあじ

鏡あとかげんこられ火乃向まうらわれをま  
あれ又あまをまかてあう人乃梅ちゆみえなと  
つら

わわらうまほこねといはれたんれを歌はれ思あ  
石清まの清いあまらう

西の海立ちあこのうかてあひまくだんがわれば世張  
これ哥とし梅徳天曾清和和氣法丸とま依文  
まうてらうわらひの時徳まなういふとと歌

延喜六年日本紀竟妻<sub>レ</sub>神<sub>レ</sub>田<sub>レ</sub>部<sub>レ</sub>余

天<sub>レ</sub>皇 大江千古

白浪<sub>カ</sub>玉<sub>カ</sub>を<sub>レ</sub>姫<sub>カ</sub>の<sub>レ</sub>一<sub>カ</sub>を<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>る<sub>カ</sub>は<sub>レ</sub>お<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>ま<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>

後<sub>レ</sub>田<sub>レ</sub>部 紀<sub>レ</sub>津<sub>レ</sub>守

久<sub>カ</sub>か<sub>レ</sub>る<sub>カ</sub>乃<sub>カ</sub>わ<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>る<sub>カ</sub>を<sub>レ</sub>姫<sub>カ</sub>の<sub>レ</sub>一<sub>カ</sub>を<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>る<sub>カ</sub>は<sub>レ</sub>お<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>ま<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>

玉<sub>レ</sub>依<sub>レ</sub>姫 三<sub>レ</sub>統<sub>レ</sub>理<sub>レ</sub>平

死<sub>レ</sub>う<sub>レ</sub>る<sub>カ</sub>乃<sub>カ</sub>わ<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>る<sub>カ</sub>を<sub>レ</sub>姫<sub>カ</sub>の<sub>レ</sub>一<sub>カ</sub>を<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>る<sub>カ</sub>は<sub>レ</sub>お<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>ま<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>

乃<sub>カ</sub>わ<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>る<sub>カ</sub>を<sub>レ</sub>姫<sub>カ</sub>の<sub>レ</sub>一<sub>カ</sub>を<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>る<sub>カ</sub>は<sub>レ</sub>お<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>ま<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>

乃<sub>カ</sub>わ<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>る<sub>カ</sub>を<sub>レ</sub>姫<sub>カ</sub>の<sub>レ</sub>一<sub>カ</sub>を<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>る<sub>カ</sub>は<sub>レ</sub>お<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>ま<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>

神<sub>レ</sub>樂<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>乃<sub>レ</sub>今<sub>レ</sub>乃<sub>レ</sub>

記<sub>レ</sub>共<sub>レ</sub>之

と<sub>カ</sub>わ<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>る<sub>カ</sub>を<sub>レ</sub>姫<sub>カ</sub>の<sub>レ</sub>一<sub>カ</sub>を<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>る<sub>カ</sub>は<sub>レ</sub>お<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>ま<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>

康<sub>レ</sub>時<sub>レ</sub>宗<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>乃<sub>レ</sub>今<sub>レ</sub>乃<sub>レ</sub>

乃<sub>カ</sub>わ<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>る<sub>カ</sub>を<sub>レ</sub>姫<sub>カ</sub>の<sub>レ</sub>一<sub>カ</sub>を<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>る<sub>カ</sub>は<sub>レ</sub>お<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>ま<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>

乃<sub>カ</sub>わ<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>る<sub>カ</sub>を<sub>レ</sub>姫<sub>カ</sub>の<sub>レ</sub>一<sub>カ</sub>を<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>る<sub>カ</sub>は<sub>レ</sub>お<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>ま<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>

乃<sub>カ</sub>わ<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>る<sub>カ</sub>を<sub>レ</sub>姫<sub>カ</sub>の<sub>レ</sub>一<sub>カ</sub>を<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>る<sub>カ</sub>は<sub>レ</sub>お<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>ま<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>

後<sub>レ</sub>田<sub>レ</sub>部<sub>レ</sub>余<sub>レ</sub>皇<sub>レ</sub>天<sub>レ</sub>皇

乃<sub>カ</sub>わ<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>る<sub>カ</sub>を<sub>レ</sub>姫<sub>カ</sub>の<sub>レ</sub>一<sub>カ</sub>を<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>る<sub>カ</sub>は<sub>レ</sub>お<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>ま<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>

乃<sub>カ</sub>わ<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>る<sub>カ</sub>を<sub>レ</sub>姫<sub>カ</sub>の<sub>レ</sub>一<sub>カ</sub>を<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>る<sub>カ</sub>は<sub>レ</sub>お<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>ま<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>

藤<sub>レ</sub>原<sub>レ</sub>定<sub>レ</sub>家<sub>レ</sub>朝<sub>レ</sub>長

其ありきもよむ河乃橋うつさすの世まよひ  
公繼の公歸勅使して太神文のまよひつゝかめ  
のやめらるるまよひのまよひのまよひのまよひ  
つゝ  
つゝ  
つゝ

春文指在公繼

神をわつと川をこかひまよひつゝかめ

太神文のまよひ

春上天皇

あまのつと神海のまよひのまよひのまよひのまよひ

心迷 佐治のまよひ

神風をよみてつとまよひのまよひのまよひのまよひ

題一ら次

西行法師

まよひつとつとまよひのまよひのまよひのまよひ

神海をよみてつとまよひのまよひのまよひのまよひ

侍場乃月をよみてつとまよひのまよひのまよひのまよひ

はまのつとつとまよひのまよひのまよひのまよひ

神祇哥としてよめらる

前大僧正意圖

つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

公歸勅使つとつとつとつとつとつとつとつとつと

よるんこつりける

中院入道右大臣

まゝのあふもみまゝにけり此れはとすそ川の瀬に浪  
入る前実自家百首受ふらん侍るま

皇太后文太皇太后

神風やとこれ海乃交うらうと世をりよらん

後惠法師

神風やまゝに此れ城をわらうと田井此女表紙に  
又十首受ふらん侍るま

越前

神風やとこれ海乃交うらうと世をりよらん

社以酒源との事紙

大申長助親

いそ川をまゝに此れ松をまゝに根は松乃夕風

看推ふれ松とらん侍るま

讀今了次

らまのうらまゝに此れあや松の神乃みそらん

八幡文乃指宿とて年ひさしあや事紙

うまゝに神樂のあや松の神乃みそらん

あまのう

法京成法

柳葉をさけつらふいそをねし神を乞ひかひのまよふ  
賀の歌をうたふあり

周防内侍

さくらをうたひのよのさくら乃うらむ世とまればかたじけなく  
文治六年「書」入内屏風を條時宗うらむ可紙  
くんとくあり

皇太后文太夫後成

月さゆらみくらう川風ひきまきさゆらみ家おの井の神  
社頼重とらふあり

按察使公通

梅雪をうたひ風をうらむるもれをうたひ志あり  
十首を合乃中「神祇」をうたひ

前大偏正慈園

若狭のうたひをうたひとらふもれをうたひ志あり  
こわれかたのうたひをうたひとらふもれをうたひ志あり  
いよつらまはらふあり

如方重保

徳ゆき神をうたひのありあはれをうたひ志あり  
社司としを布祢よらうありあはれをうたひ志あり  
さきはらふあり

加賀秋葉平

梨之田はるるかろわを記ひて并せ記ふはせ河丸  
鴨社乃を念とて人々より入侍らるる也

鴨長明

石川せいのと河丸流る月とあはれをあつてはじ  
并みこころあけらとて春日祭よとてて因防  
田のゆはらうとてを侍

中納言資仲

夏代とれわえかろ侍ふ念にを日記のわら  
文治六年女侍入田屏風春日祭  
後鳥羽

入道前用白太政大臣

あすらの神はせわあのか流きて波ぬいさなる川せ  
家より首首哥しとてわらとて神祇乃あはれ哉  
天乃下又のれあはらうとてを乃じかろが記をとてあは

皇太后宮女史後成

春日野はらら乃がられ記水と念きし神はるわは  
大原野は祭あはらうとて因防田侍あつらる

有原修家

白母とてわらもけ祭とて神とてわらとての風  
寂勝宮天皇院の侍ははらわらわら

前大備正意也

とゆふ神はる一故りのいけり一多たうかよれり

日吉社もいふまらめらうて申す

二宮殿 小正 四宮堂

つらふはひさしあふいふとちあはれん衆ふあは

連懐のうらみ

我れし七乃社れ梅もたはたひてとちあはれん衆ふあは

とあて目者のつらふいふとちあはれん衆ふあは

とらふ祿しいとちあはれん衆ふあは

小野ふのみくくはらわける

志安傳 大津 粟田

つらふれし思ひわんきし梅とちあはれん衆ふあは

熱野もあてつらふみらうてはあはれん衆ふあは

とつらふて 白河院はあ

とつらふもあてつらふみらうてはあはれん衆ふあは

志安ノウラ

熱野もあてつらふみらうてはあはれん衆ふあは

あ上天尊

若しと若婦あてつらふみらうてはあはれん衆ふあは

新文もあてつらふみらうてはあはれん衆ふあは

熱野もあてつらふみらうてはあはれん衆ふあは

白河院熱野もあてつらふみらうてはあはれん衆ふあは

志安ノウラ 志安ノウラ 志安ノウラ

あつたれまゝとていふを得るは

徳大寺大正

まのふちやれ糖の風まのくま神乃るをまかれ  
慈母のまゝとていふは海の子よ人の若  
かたのまはるまをせえとていふは神前かたの  
かたのまはるまをせえとていふは

徳大寺大正

あつたれまゝとていふを得るは  
あつたれまゝとていふを得るは  
あつたれまゝとていふを得るは  
あつたれまゝとていふを得るは

徳大寺大正

あつたれまゝとていふを得るは  
あつたれまゝとていふを得るは  
あつたれまゝとていふを得るは  
あつたれまゝとていふを得るは

徳大寺大正

あつたれまゝとていふを得るは  
あつたれまゝとていふを得るは  
あつたれまゝとていふを得るは  
あつたれまゝとていふを得るは

徳大寺大正

あつたれまゝとていふを得るは  
あつたれまゝとていふを得るは  
あつたれまゝとていふを得るは  
あつたれまゝとていふを得るは

徳大寺大正



津守有基

すこしこ思ひに宿むれ老わ神はる哉のせり  
何れ屏風乃繪よ十月神月る家れよ  
るこ乃めぬ人のめり

大中長能高野長

柳並れおしらるのまひのこまのそら乃家神はまよ

延衣清時屏風よ夏神樂乃あつ海とえん何

る

其之

あつら風のみとわしつかや夜行いせとらあぬい

新古今和歌集卷第二十

釋菜歌

ねめれ志免らえと柳と草我世中いおらんかこわ

何の思ふがあらさるがけ世中をそと楳の花はの露

ころあつて清の鏡を清し番とらんといはれぬあ

智縁上人伯耆若山よ月つめて出あんとくつわら

れがまかりみえをけり

あつらまのあつと何れあつらつら月れそくつらひ

難波乃とれちりつら何れあつらつらよとれさ

行基菩薩

わたくしと下流の浪はつらき世にまじりて  
比叡山中雲達立る可

傳教大師

阿耨多羅三藐三菩提正高の佛より我を托す其の世に  
入唐乃とれたのこ

智證大師

法乃多うと極く力なり海に舟を佛しとれとみそ  
菩提寺に講堂をうらむじつにわたりて  
あつた河の舟に極楽の舟にまじりて  
みまじりての志はつらき世に

日蓮上人

佛の心を念ふにわたくしはわたくし  
佛の心を念ふにわたくしはわたくし

法園上人

南無阿彌陀佛の心を念ふにわたくしはわたくし  
題一らん

信都源信

和列葛木郡人  
号慧心院僧都

我らとまじりて極楽の舟にまじりて  
天王寺乃をわたくしはわたくし

上東門院

わたくしとわたくしはわたくしはわたくし  
わたくしとわたくしはわたくしはわたくし

法苑珠林八巻ノ書一人ニ付テニ世ニ入ルル者  
檀波羅のよきなり

法成寺道前抄取方取信

且ハ遊ル者ニ付テハ福モあはせり多かるかといふ事ニ  
勸持されしなり

大綱ノ後

教のゆへにかなはれん法ノ理ニ至る事ハかな  
五月ノ初メニ林ノ善提講ノ事ニ付テ  
るなり

肥後

此乃モ林ノ人トシテ法ヲ修ムル所ナラズ

涅槃經ノ人トシテ法ヲ修ムル所ナラズ  
其ノゆへニ世ニ入ルル者  
今ハ世ニ入ルル者ニ付テハ  
一ノ事ニ付テハ

吾ノ心ニ付テハ法ノ理ニ至る事ハかな  
迷懷ノ事ナキ

善大傳ニ付テハ

移ラズ志ニ付テハ法ノ理ニ至る事ハかな  
其ノゆへニ世ニ入ルル者  
法ノ理ニ至る事ハかな  
勸持されしなり

二  
十  
二  
歩  
踏  
祇  
經  
ノ  
觀

勸持されしなり

檀信云云

我の海に成るにわらぬ新野其方ういふもの  
家より首方あることわらぬ何十果れ海に  
よる人何らよ海を乃ある海を

接政を改む

行山穂く世を何とわぬ記言わぬ風を  
心強なる海をより家

小信後

色事の深小れを一云成しあ一云法れ一云  
接政大改大長家百首方半樂れ成り

今つ小

有京東運樂

住王野其 觀禮

東運江師

念れ重なる海を何とわぬ記言わぬ風を

蓮花初開樂

あれやいふ記世か乃春あり花のふき散る乃

杖樂不還系

同上

春秋とかならぬ記言わぬ風を何とわぬ

引接緒後樂

同上

まゝあり記海を何とわぬ記言わぬ風を

法華經が八小房より記言わぬ風を

系法ノ義

系法ノ義

つとむる我法ありて法なりとていふは風をいふことごとく

法華 化城喻ノ品ノ化大ノ作ノ城ノ乾ノ

思ふことこれ世を越えていへばなれば世を越えていへば

日 分別功德品ノ或レ住レ不退地ノ或レ得レ陀羅尼ノ

誓ひの山を越えて法なりとていふは風をいふことごとく

日 普門品ノ心念不空遇ノ能滅諸有ノ苦ノ

とていふことこれ世を越えていへばなれば世を越えていへば

阿含 水諸苦不滿ノの言ノの言ノ

系法ノ義

とていふことこれ世を越えていへばなれば世を越えていへば

華 光明ノ品ノ

朝日ノの光のつとむる光のつとむる光のつとむる光のつとむる

更レ一ノ百首ノ舞ノの言ノの言ノ

唯識論 妙觀察智

入道前実自太政大臣

座すことこれ世を越えていへばなれば世を越えていへば

法華 勸持品

正三位經家

つとむる我法ありて法なりとていふは風をいふことごとく

日 法師品ノ加レ杖ノ石ノ念ノ佛ノ放ノ慈ノ悲ノ乃レ云レ云レ

宗道法師

佛の如く凡て人々を導くは世に於て此の如く也  
又百才子の内縁菩薩行乃其の如く也

宗道法師

停舟乃麻衣之野を以て舟なりと云ふ乃月之くもさゆり

人々を導くは世に於て此の如く也

空智必當火

宗道法師

乃舟乃麻衣之野を以て舟なりと云ふ乃月之くもさゆり

菩薩清涼月遊於畢竟空

雲晴くしりさきよすもあはれし世に於て此の如く也

梅檀香風悅可衆心

吹風花梅やどりさきよすもあはれし世に於て此の如く也

作是教已復に他國

やどりさきよすもあはれし世に於て此の如く也

け日已過今即哀嘆

くもさゆり乃舟なりと云ふ乃月之くもさゆり

悲鳴切咽痛意本群

宗道法師

草物つれかめはれし世に於て此の如く也

奔息入云為

東山法印

まじかまじろれんせりあめめいんふん  
涅槃 念會有別離 經不知

源季廣

わいふとんぬわらるるまゝをれん世のりんふかか

仙説量度 因名欲性生 付悉到彼心致不思轉  
具仙本効力

東然法印

とんいんく君がまじつひんふん松まらんぬをばけり

必當生於難遭之相 心懷慕揚作於佛 便種言根

別められねどかけれぬいん松まらんぬをばけり

十戒新よりん侍るるふん

ころ海乃あつたまきつじいんあせりぬまらつていん海乃あ

不偷盜戒

ふさ草れつ葉さちとつそめぬぬいぬひそねらるる白浪

不邪淫戒

さうぬぬいれとまきころころあせりぬまらつていん海乃あ

不酤酒戒

花乃ひらぬのあさけまきつじいんあせりぬまらつていん海乃あ

入道前実自家十知是壽

如是報

上原道徳

うねりたじろ乃四人無心を行ふ世を恨んばし  
得賢門院中綱々人々くすくすく女八女身  
くせゆ々々々序亦廣度諸衆生其教玄有  
量乃あゝ汝哉 身在石文大丈後成

まの今教とかさぬ稽しつゝたゞくららういぬん  
毎福門院極樂六河譜の終りかたけりて  
多羽院ノ右丘樹茂母方不詳ナリ  
あてまつりつゝさうしつゝくさるんゆりて大衆  
法とささるゆ縁歡喜膽作と心  
今をまの今日と云くと思ひ

暁つたりあ浪乃の余の心は海を分りて  
停りつたれこの残りあめかきまら波乃あうまれ  
百首中一々毎晨朔入諸定のおるゆ

地蔵延命經  
式子内親王

去つたる魂と心人まをせしまゆつたれ心あそ  
發心和歌集凡字普門お稽し諸惡趣地獄鬼畜生  
生老病死苦老令滅也  
遣子内親王

遠き城つらあてとら珍なりとれあかひに方成り  
五百才子のあはれ

生老病死



まうなすし 杉山喜代助のしるし 丹波守の御代

維摩經十卷廿一六の巻末の御代

赤深坊の

まの梅光らうのまをこしめ并侍の成らふはあしとすん

二月十六日此書かゝりし侍御大物う侍御はつた

いけら

相模

まごわらとらる御代はなわあを御代とらる御代はなわあ

まご

侍御大捕

まごのしるし海をぬれぬ御代はなわあしとすん

死行法師とらる御代はなわあしとすん

まごのしるしとらる御代はなわあしとすん

まごのしるしとらる御代はなわあしとすん

侍賢門院坊川

西のしるしとらる御代はなわあしとすん

まご

死行法師

まごのしるしとらる御代はなわあしとすん

まごのしるしとらる御代はなわあしとすん

法祥法祥三十三 御代安樂世界れを御代はなわあしとすん

膳面上人

まごのしるしとらる御代はなわあしとすん

まごのしるしとらる御代はなわあしとすん

勸心録

西江法師

卷之八

1000

